

資 料

海生研シンポジウム2018「気候変動と海生生物影響」

シンポジウム報告にあたって

香川謙二^{*1 §}

公益財団法人海洋生物環境研究所は、発電所取放水が漁場環境に与える影響について科学的に解明する調査研究機関として1975年に設立され、以来様々な調査・研究活動を実施してきた。そして、時代とともに変化する社会的ニーズに応えるため、「エネルギー生産と海域環境の調和」と「安心かつ安定的な食料生産への貢献」を目標として掲げ、発電所取放水の影響解明に加えて、海洋環境放射能のモニタリング、海生生物への化学物質の影響・蓄積実態の把握、地球温暖化に伴う海水温上昇や海洋酸性化などの調査研究にも研究対象を広げてきた。

平成30年7月に閣議決定された第5次エネルギー計画において、2030年エネルギーミックスの実現と2050年シナリオの方針が示された。この中でエネルギー起源のCO₂削減については、2020年頃のCCUS^{*2}技術の実用化を目指した研究開発、国際機関との連携、CCS^{*3}の商業化の目途等を考慮しつつできるだけ早期のCCS Ready^{*4}導入に向けた検討などを進めることとされている。さらに風力発電については、陸上風力発電の導入可能な適地が限定的な我が国において、洋上風力発電の導入拡大は不可欠であるとうたわれている。

このような動きの中で、平成30年7月31日に、海生研シンポジウム2018「気候変動と海生生物影響—エネルギー生産と海域環境の調和の視点から考える—」を開催した。

本シンポジウム前半では、当所の喜田がイントロダクションとして気候変動による沿岸域の変化と対策について、地球温暖化と海洋環境、気候変動への世界的な対応、気候変動緩和策について概説した。気候変動による沿岸域の環境と生態系への影響として、まず始めに、(国研)水産研究・教育機構 水産工学研究所 桑原氏には水温上昇に伴う藻場への影響と回復対策として、藻場の減少要因、磯焼け対策による藻場の回復状況を説明して頂いた。次に(国研)海洋研究開発機構 地球環境観測研究開発センター 原田氏には海洋酸性化の環境・資源への影響について、二酸化炭素の吸収域としての海、海洋酸性化による海洋生物への影響、経済的インパクトを説明して頂いた。最後に当所の林が海生研における海洋酸性化研究について、沿岸海域の実態調査、生物影響調査、種苗生産現場での対策例について説明した。後半では、気候変動緩和策としての海洋利用とその課題について、始めに当所の吉川がCCSと環境影響評価について、日本のCCSプロジェクト、海底下CCSの環境影響評価、海洋環境の監視計画とその実態について説明した。次に当所の三浦が洋上風力発電と環境影響評価について、風力発電とその世界的動向、洋上風力発電の世界的動向と日本の現状、洋上風力発電に係る環境影響評価調査について説明した。最後に、当所中央研究所長の三浦を座長としてパネルディスカッションを実施し、会場の質問に答える時間も設けた。一般市民の他、行政、水産、電力、研究機関、マスコミ等から当初予定を上回る約130名の方へ出席いただいた。

*1 公益財団法人海洋生物環境研究所 事務局 (〒162-0801 東京都新宿区山吹町347番地 藤和江戸川橋ビル7階)
§ E-mail: kikaku@kaiseiken.or.jp

*2 CCUS (Carbon dioxide Capture, Utilization and Storage, 二酸化炭素回収・有効利用・貯留)

*3 CCS (Carbon dioxide Capture and Storage, 二酸化炭素回収・貯留)

*4 CCS Ready (大規模排出源の設計・建設の段階から、CO₂回収設備等を設置するための用地確保等の準備を予め行っておくこと)